

Topics

「江戸の面影—浮世絵は何を描いてきたのか」

新収蔵作品展「画人たちの1万時間～写生、下絵、粉本類を中心に～」





浮世絵は、何を描こうとしているのだろうか。そこには何が、そして、どんな人々が描かれているのだろうか。おそらく皆さんが、浮世絵をご覧になった時に、ふと思ひ浮かぶ問いではないだろうか。そんな疑問を、実際に遡る絵画の優品を通して、明らかにしようとして企画したのが、この度、千葉市美術館で開催する「江戸の面影—浮世絵は何を描いてきたのか」(2014年1月25日～3月2日)なのです。

憂き世のさまを描く絵画とも、浮世絵は言われています。この世に生きる人々、喜びも悲しみも抱えて、いまそこに生活する人々の姿を描く浮き世(Floating World)の風俗画。それが浮世絵です。

日本の近世とされる16世紀の後半、つまり室町時代後期から桃山時代、さらには江戸時代初期には、時粧の風俗を描いた風俗画が、盛んに制作されました。京都の市中と郊外を描いた「洛中洛外図」、社寺の祭礼や名所での遊楽の様を描いた「祭礼図」や「遊楽図」、あるいは「歌舞伎図」などがそれです。それらは時代の絵画のもつ性格を特徴付ける重要な画題でもありました。

そこには都の賑わい振りや現世を謳歌する多くの市民や大衆が登場します。このような風俗画(近世初期風俗画とも言います)の制作を依頼し、注文者したのは、当時、社会的にも上層の階級に属する人たちでした。そしてまたそれを享受し、鑑賞したのも同じように上層の人々でした。つまり、上層の人々が、庶民の生活する様を眺め見るという視線が、ここにはあるのです。見る者と見られる者、描かれる人々と、それを見る人たち。その間にある視点や位置には、明らかに違いがあるということです。その点で、浮世絵とは全く異なっています。

浮世絵は、描かれる者たちとそれを享受する者、さらにはそれを描く絵師さえもが、同じ地面の上に立っています。同一の視点や視線の上に立っている。これこそが初期風俗画と浮世絵との間にある大きな性格上の相違点です。このことは、浮世絵を理解し、鑑賞する際に忘れてはならない一点と言えるでしょう。そして、浮世絵が「庶民の芸術」と呼ばれるのも、まさにそこにある訳です。

浮世絵には、江戸時代に二大悪所と呼ばれた、芝居や遊郭、そこに活躍する歌舞伎役者や遊女が多く描かれているのは言うまでもありません。しかし、それだけではないことも皆さんご存知の通りです。岡場所と呼ばれる所の芸者、評判の町娘(店の看板娘)、商家の婦人、武家の奥方や女中、美少年、娘たちのおしゃれや恋、江戸の名所など、その題材は多岐にわたっているといえます。

「江戸文化の中心に花咲いた浮世絵は、流行風俗を描いて当時の人々の関心を引き、大衆を享受者に巻き込んだ、世界でも稀な芸術」と本展担当の学芸員は、浮世絵を位置づけます。そして彼女は、「浮世絵は江戸という特別な都市に育まれた美意識や文化を余すところなく伝え、今では失われつつある日本の美德のありかを思い起こさせてくれようとしているようです」と語り、さらに浮世絵を通

じて「現代にまで生き生きと伝えてくれる江戸の姿を、われわれはどのように理解すべきなのでしょう」と自らに問いかけ、その解決のために「幕末～明治初期に来日した外国人達の日本旅行記や、江戸時代の狂歌や随筆の中の言葉をきっかけに、浮世絵が表現してきた事象を丁寧に解き明かし、その理解を深める」という仕事に取り組みました。

浮世絵は、絵画史のみならず、服飾史、演劇史をはじめとした史料の宝庫とも言われています。当時の人は、浮世絵をみれば、誰が描かれているのか、描かれているのがどんな内容であるかを容易に理解出来たことでしょう。いまは少しばかりのお手伝いが必要かもしれません。しかし、そんなに難しいことはありません。まずは絵の前に立ってその絵をみることです。何かが絵から伝わって来る筈です。もし絵が、何も話してくれなかったら、次の絵の前に移りましょう。それも駄目ならまた次にと移動してください。そのうち必ずあなたの気持ちにぴったりの、あるいは感性に響く「タイプ」に出会うに違いありません。

浮世絵は、江戸を知る、江戸の文化や美術を知ることの出来る「宝の箱」、いやわたしたちの「おもちゃ箱」とも言えるでしょう。是非お気軽に美術館にお出掛けください。そして浮世絵の魅力を、十分にご堪能頂ければ、企画者としては望外の幸せです。

最後になりますが、昨年も多くの皆様に千葉市美術館にご来館頂き心よりお礼申し上げます。ご好評のうちに歳を納めさせていただきます。

新年は、千葉市地域文化財第1号の民俗文化財「登戸^{のぶと}の神楽囃子」の、登渡神社登戸囃子連の皆さんによるお囃子と獅子舞で幕を開けました。3月には恒例の「千葉市民美術展覧会」。4月8日からは、「光琳を慕う—中村芳中」(5月11日まで)と続きます。それ以降も次々にご覧頂く皆様の興味を駆り立て、鑑賞後に満足感をお持ちいただけるよう、スタッフ一同、企画を練り、工夫を凝らしてご来館をお待ちしております。

本年も、千葉市美術館を何卒ご支援、かつご活用くださいますよう、年頭にあたりご挨拶申し上げます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

〔館長 河合正朝〕



(左) 江戸の面影展出品の鈴木春信「蚊帳の母と子」(右) 登渡神社登戸囃子連による獅子舞

江戸の浮世絵は 何を影描いてきたのか

The Nostalgic Images of Edo

「双子コーデ」と江戸の芸者

若い女の子の間で「双子コーデ」というのが流行っているとテレビで見ました。実際は姉妹でもない友達同士で、双子のように同じ格好をするというのが定義で、その番組の検証では、「目立つ」「可愛く見える」というのがこのファッションの利点として挙げられていました。

そこでまず思い出されたのが江戸市中橋町あたりの10代半ばの芸者たちのことで、天明期(1781-89)の浮世絵によく描かれているようです。まったく揃いの着物で描かれることは稀なので「双子コーデ」とまではいかないのですが、鳥居清長の「茶見世十景 両国」(図1)に描かれたように、この頃共に袖が地面に着きそうな大振袖で、底の薄い"べったんこ"下駄、日傘の青傘を持って二人連れで歩くという若い娘の姿がしばしば浮世絵に描かれているのです。吉原の遊女ほどの特徴はありませんし、一般女性でもありえる姿なので見逃されがちなのですが、この特徴を心得ておくと浮世絵の見え方も随分違ってくることがあります。二人連れで同じような格好をしていれば「目立つ」、ということでテレビの検証に妙に納得してしまいました。流行を追うことが浮世絵主題の大前提なわけですが、江戸の町で、目立って可愛い存在の橋町の芸者が、好んで描かれていたということでしょう。

江戸の芸者は、地域によってファッションや習慣に違いがありますが、実はこの橋町の若い娘芸者の最大の特徴は、「芸がない」ということでした。この地域の芸者は、伝統的に「踊り子」と呼ばれていましたが、踊れるわけでもなかったようです。当時の随筆に、ちょっと三味線かじった程度で、少しでも見た目が良ければ皆芸者になったと書かれている[森山孝盛『^{あま}蟹の^{たくも}焼藻^き』天明7年

(1787)]のも、おそらくこのあたりの芸者のことを言っているのでしょう。つまり芸などなくても、座敷を盛り上げるコンパニオンとして、若い娘たちがちょっとした小遣い稼ぎに芸者を称していたようなのです。

もう一つ隅田川西岸地域の芸者の面白いファッションを挙げておくことにしましょう。富本節を習う女の子の間で、二人とは限りませんが、黒仕立ての羽織の男装をするというのが天明期に流行ったようなのです。鳥居清長の「富本豊前太夫とその弟子」(図2)という作品で、前に描かれた二人がその女の子の典型的な姿で、並べばこれもまたなかなかのインパクトある「双子コーデ」です。

一方、橋町に対抗するファッションで、あくまでも大人の女で売ったのが、隅田川の東岸地域の深川(辰巳)芸者です。同じ天明期でも、鳥居清長の「当世遊里美人合 多通美」(図3)に見るように、渋い色柄の留袖の着物に、ちょっと所帯染みた感じもする黒襟などをつけ、外出は「厚底」の駒下駄というのが定番ファッションでした。「大人の女」を強調するために若い娘を連れて歩くという習慣はあったらしいものの、橋町の芸者のように同じような姿の二人連れで描かれることはないようで、芸も色もあった深川の芸者は、お揃いのファッションなどというよりも、むしろ個々の存在感が際立つ方が重視されたのかもしれません。

幕末になると、隅田川東岸の両国界限や、向島などに、同じ着物を着た二人連れのまさしく「双子コーデ」の芸者二人連れがよく描かれるようになります。例えば歌川広重の「江戸 高名会亭 向嶋」(図4)では、隅田川の土手に隣接した平岩という料理屋へ、客に連れられた二人の芸者が揃いの着物を着ています。同じよう



(図1) 鳥居清長「茶見世十景 両国」中判錦絵
天明3-4年 (1783-84) 頃 東京国立博物館蔵
Image:TNM Image Archives



(図2) 鳥居清長「富本豊前太夫とその弟子」
大判錦絵 天明3-4年 (1783-84) 頃 国立劇場蔵



(図3) 鳥居清長「当世遊里美人合 多通美」
大判錦絵 天明 (1781-89) 前期 霜禮次郎氏蔵

に、広重の肉筆画の名品「墨堤二美人逍遙図」(図5)でも、芸者の二人連れが、帯や下着こそ変えていますが、揃いの着物で隅田川の土手をあがってくる様子が描かれています。

さて、以上は官許の遊里吉原以外の江戸の芸者風俗ですが、「双子コーデ」の定番は、実は吉原の方が徹底しているようです。吉原を描くほとんどの浮世絵は、吉原でも最高位の遊女、いわゆる花魁を描いていますが、その身の回りの世話をする禿や、まだ一人前の遊女とは認められていない新造または振袖新造といった娘は、ほとんどが二人組で、衣装を揃いにしています。例えば喜多川歌麿の『青楼絵本年中行事』「仲の町花盛之図」(図6)では、吉原のメインストリート仲之町を、客(大尽)を迎えた花魁が道中する様子が描かれていますが、大尽の両脇に、紫の鳶模様の揃いの着物を着た禿、後から来る花魁の両脇にはやはり揃いの模様の紅い振袖を着た振袖新造が付いています。いうまでもありませんが、一人前の花魁同士が「双子コーデ」をすることはなく、またこの図でも後から付いて来ますが、番頭新造と呼ばれる花魁たちの世話をする年増の女もお揃いの二人連れということはありません。どうやら一人前ではない少女が「双子コーデ」なのであり、ここでは花魁の飾りのような存在として、可愛らしく目立つことが求められたものなのでしょう。

実は浮世絵における風俗的検証というのは、それほど進んでいるとは言えない状況にあります。特に吉原以外の芸者風俗などは、わかっていないことだらけと言ってもよいでしょう。今回の企画展「江戸の面影—浮世絵は何を描いてきたのか」では、可能な限り江戸時代当時の人々の視点に近づいて浮世絵を見るということを目的に、風俗的事象を調べ、それを知っていただくよう努めたつもりです。また当時の文学や幕末明治に來日した外国人の言葉をきっかけに、その価値観や美意識に近づこうと企画した展覧会でもあります。まだまだわからないことは多いままですが、これまでに判明したちょっとした知識によっても、一層浮世絵が面白く

見えてくるということがあるでしょう。江戸を知るための8つのエッセンス的なテーマを設けて浮世絵を展観するこの展覧会を通して、さらなる江戸の魅力を知っていただければと思っています。

[学芸課長 田辺昌子]

関連イベント

■講演会「浮世絵黄金期の諸相」(事前申込制)

講師:内藤正人(慶応義塾大学教授)

2月8日(土)14:00より/11階講堂にて/定員150名/聴講無料

※往復ハガキによる申込制/1月29日(水)必着

※詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください

■特別企画「結うこころと美—江戸娘髪結いの実演」

解説:村田孝子(ポーラ文化研究所)

結髪師:林照乃

2月16日(日)14:00~15:30(13:30開場)/11階講堂にて/観覧無料

※会場の出入りは自由です(混雑状況によって入場を制限する場合がございます。)

■特別企画「錦絵摺の実演」

解説・実演:公益財団法人アダチ伝統木版画技術保存財団

2月23日(日)14:00~15:30(13:30開場)/11階講堂にて/観覧無料

※会場の出入りは自由です(混雑状況によって入場を制限する場合がございます。)

■市民美術講座「江戸芸者と辰巳芸者」

2月15日(土)14:00より/11階講堂にて/先着150名/聴講無料

講師:田辺昌子(当館学芸課長)

■美術館ボランティアスタッフによる多色摺ワークショップ

1月25日(土)10:30~12:00、13:30~15:00/1階エントランスにて/参加無料

江戸の面影 浮世絵は何を描いてきたのか

2014年1月25日(土)▷3月2日(日)

[休館日] 2月3日(月)、2月10日(月)

[観覧料] 一般 1000(800)円、大学生 700(560)円

※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※()内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの65歳以上の方の料金

※前売券はローソンチケット(Lコード:37849)、セブンイレブン(セブンコード:

026-779)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口

(3月2日まで)にて販売



(図4) 歌川広重「江戸 高名会亭尽 向嶋之図」平岩大判錦絵 天保(1830-44)後期 国立歴史民俗博物館蔵



(図5) 歌川広重「墨堤二美人逍遙図」絹本着色 嘉永(1848-54)-安政5年(1858) 那珂川町馬頭広重美術館蔵



(図6) 喜多川歌麿『青楼絵本年中行事』彩色摺絵本 享和4年(1804) 千葉市美術館蔵

新収蔵作品展 画人たちの1万時間～写生、下絵、粉本類を中心に～

千葉市美術館に新しく加わったコレクションをご紹介します「新収蔵作品展」。今回は、画家の家に伝えられた資料類で、近年寄贈・寄託いただいたものを中心に、参考となる所蔵品もあわせて展示いたします。

江戸時代の絵師や近代の画家たちは、それぞれいつから絵を志し、どのようにして身を立てていくことになったのでしょうか。絵を生業とする者たちが、自己確立のために奮闘した時間の痕跡を、これらの資料から具体的にたどってみることができるのかと考えました。題して「画人たちの1万時間」——。

“1万時間の法則”とは、国際的に人気のビジネス書、マルコム・グラッドウェルの著作で目に触れた言葉です(Malcolm Gladwell *Outliers: The Story of Success*, 2008 / 邦訳『天才！成功する人々の法則』、勝間和代訳)。“Outliers”、すなわち、並外れてすぐれた人、成功者は、才能だけによってつくられるものではない。多くの練習を重ねられる好機自体を持ち、没頭し得た修練の時間が1万時間にも達した頃、人はひとかどの達成を得る——これは内容の一部の私の読みではありますが——この「1万時間」という数字を考えると、日中の陽があり技術の習得に集中し得る、例えば1日6時間の仕事を週5日欠かさずつづけられたとして、6年半という年月です。毎日とはいかず週3日なら約10年、あるいは1日3時間しか練習できなければ毎日欠かさずでもやはり約13年です。この時間感覚は、100年前の明治末、150年前の幕末期頃の技術習得の場にはどの程度適用できるのでしょうか。

まずご紹介する江戸狩野派の資料は、幕府の御用を務める表絵師15家のうちの一家、麻布一本松狩野家の後裔の方より、一昨年度ご寄贈いただいたものです。幕末から明治期のまくりの状態の下絵・粉本(模写や絵手本のこと)類がほとんどで180点ほどから成ります。大正末期にこの資料や家譜を整理し、今に伝えたのが狩野太三郎(休学実信、1865-1930)で、池上本門寺南之院にある墓の整備も行っています。彼のその頃の遺書草稿には、当家が明治23年の火災で資料の多くを失ったこと、期待の息子にも先立たれ、

病弱な自らも画家として見るべきものを成し得なかった慚愧の念が記されていますが、実は多くの資料が、戦後まもなく、本家筋の下谷御徒士町狩野家から東京芸術大学に寄贈され、伝わっていました。避難し得たものなのか、何らかの事情で既に分かたれていたものなのか。そのようなわけで、今回展示の資料は明らかに本来あったもののごく一部ですし、無名にして肝心の完成作品がないという弱みがありますが、芸大の資料や、全国に点在する各藩の御用絵師の資料も参照しつつ、全体を推量してみたいと思います。

筆者名のある資料の多くは、太三郎が養子に入った先代の狩野休円玉信(1835-84)によるものです。玉信は幕府の御用絵師として最後の代となりました。例えば、《紅葉に鹿》(図1)は、英一蝶の署名のある原図を安政3年(1856)8月16日に写したものと書き入れた文字からわかりますが、絵の不自然な構図から察するに原図自体がすでに写し継がれた粉本であったでしょう。このとき玉信は22歳。芸大の資料を参照すると、この8月には1日おきに、狩野探幽の原図を粉本とする鳳凰や狐の図を描いており、走獣図の模本を集中して制作したようです。同じ年の4月には、原図が雪舟筆という羅漢図を毎日1図描いています。

かつて橋本雅邦が書き残してくれたためによく知られる奥絵師木挽町狩野家の教育課程では、「臨写にはじまり臨写に終わる」練習のプログラムがあり、手本も決まっており、基礎力のある画家の子弟が入門してから順調に進めば通常11、2年かかって、師より「一字拝領」する卒業に至ったようです(橋本雅邦「木挽町画所」『国華』3号、明治22年)。格のちがう表絵師で当時の麻布一本松家がそれほど門弟を抱えていたようには見受けられませんが、家督を継ぐ当主も練習の道筋は同類であったことでしょう。休円の資料が残るのは15歳からで、「初御目見」が18歳。資料は25歳頃までのものが多数であり、10年の訓練期ということを感じさせます。その後幕府の御用で東照宮の修復事業や万博への出品屏風制作に参加しながら、同時に盛岡藩南部家に召し抱えられ盛岡に下向しており、岩手県の士族として明治を迎えているのも興味深い仕組みです。



(図1) 狩野休円玉信《紅葉に鹿》 安政3年(1856)
千葉市美術館蔵(狩野静子氏寄贈)



(図2) 狩野休円玉信《七福神》 江戸時代後期
千葉市美術館蔵(狩野静子氏寄贈)



(図3) 「田中抱二関係資料」 江戸時代後期～明治時代前期
個人蔵(千葉市美術館寄託)

次に、同じ幕末から明治初期にかけて、幕府という公儀に対していわば民間の絵師の資料として、田中抱二(1812～85)の写生帖や縮図(古画などを縮写したもの)類も紹介します。抱二は、酒井抱一の最晩年の弟子です。鈴木其一、池田孤邨らより年下ですが、抱一門下の四天王と言われ、抱一風をよく踏襲した穏やかな画風を展開しました。これまでもっぱら抱一の資料を後世に伝えた功績の面から紹介をしてきました。今回は、幕末明治の激動期にあって、抱一最後の直弟子を謳って生きた、抱二その人にも関心を寄せ、画家の日常を見てみたいと思います。この資料は、入門時から最晩年までの、絵に関する雑記帳といえる画冊を揃えており、江戸琳派のものとしては珍しい資料です。

例えば、抱一の画房の雨華庵は、毎月一と六のつく日が稽古日であったと抱二は伝えています。月に6、7日です。13歳で入門した頃の画冊には、キノコやカブトムシなど、拙くもまじめで微笑ましい写生の断片や、堅い筆遣いの縮図が続きます。草花の写生に添えられた日付を見ると、例えば19歳の年は、時によって毎日、平均すると2、3日に1、2図は描いていますが、「一万時間」までは15年くらいはかかりそうです。資料を通覧すると、30歳代半ば頃から、筆線も明らかにこなれたものになっているように見えます。また、自作の控えなどからみて、40歳代半ば頃から屏風や襖などの制作が相次いでいるようです。

江戸時代もこの頃ともなれば、例えば公用日記ほか膨大な情報を提供してくれる記録魔、狩野晴川養信とその周辺、組織的に多くの粉本・模本を残した谷文晁の画房、河鍋峯斎の才気溢れて興味の尽きない絵日記など、生き生きとした材料がほかにも色々と思ひ出され、各所で着々と整理公開が進んでいます。当館ではこのような江戸時代の資料をあまり所蔵していないので、併せてご覧いただくのによい機会かと思ひます。浮世絵師の例なども若

干加えて紹介する予定です。

最後に、千葉市ゆかりの近代日本画家、石井林響(1884～1930)の資料です。林響は山辺郡土気本郷町(現在の千葉市)に生まれ、旧制千葉中学校在学中に堀江正章に画才を認められて画家を志し上京しました。日本美術院展を見て魅了され日本画に転向し、橋本雅邦に入門。巽画会や紅路会などに参加、その後文展、院展、帝展などで活躍しました。本名は穀三郎ですが、はじめ「天風」と名乗り、大正8年(1919)の第1回帝展に出品の頃より「林響」の号を用いています。今回展示の受贈資料は、明治期に描いていた歴史画から、大正期に転回していった南画の情趣のもの、昭和に入ってから画房「白閑亭」を郷里に近い大網町宮谷(現・大網白里町)に構えるも4年後に没してしまったその最晩年の作と、林響の短すぎる生涯を俯瞰し得る内容です。いかにも遺族のもとに遺されたものらしい私的な趣で、帝展出品作の下絵や、当初志していたという洋画の習作があるのも珍しく、長男誕生を祝って描いた《鍾馗》(図5)や、スケッチ類や写真などの資料とあわせて、画家が日々生きてきた息吹を伝えてくれます。

才能のきらめきが命であるように思われる絵の世界においても、表わしたい内容を切実に持つこと、その世界を構築し得る背景と、何よりそれを可能にする技術の高まりという裏付けが必要です。達成した世界を堪能するまでには到り得ない限られた資料の展示ですが、そのような「画人たちの1万時間」をそれぞれに思い描いてみるひとときとなれば幸いです。

関連イベント

■市民美術講座「画人たちの1万時間～狩野派・琳派の新資料紹介」
2月22日(土)14:00より/11階講堂にて/先着150名/聴講無料
講師:松尾知子(当館学芸員)

新収蔵作品展

画人たちの1万時間～写生、下絵、粉本類を中心に～

〔観覧料〕 一般 200(160)円、大学生 150(120)円

※()内は団体30名以上

※千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※「江戸の面影」展ご観覧の方は無料



(図4) 石井林響《靈泉ノ図》明治38年(1905)頃
千葉市美術館蔵(石井淳氏寄贈)



(図5) 石井林響《鍾馗》大正14年(1925)
千葉市美術館蔵(石井淳氏寄贈)



(図6) 魚屋北溪《摺物下絵校合摺貼帖》
千葉市美術館蔵

去る2013年11月6日(水)に千葉市美術館友の会メンバー特典である「友の会バスツアー」を開催いたしました。例年大変な人気のこの企画。今年は30名の定員に対して121名のご応募がありました。

さて、今年のツアーのテーマは「近代日本画家の画室(アトリエ)を巡る」。大田区立龍子記念館、山口蓬春記念館、鎌倉市鏑木清方記念館の3館を訪ねました。実はいずれの記念館も建築家・吉田五十八が関わっているというのが、今回の裏テーマです。

最初の訪問先は大田区立龍子記念館です。こちらは文化勲章受章と喜寿の記念として昭和38年に龍子自身の発意と設計により設立されました。この日は開館50周年企画展「龍子がめざしたもの」と、隣接する龍子公園を鑑賞。平澤館長がお迎えくださり、学芸員の黒崎さんと木村さんにご説明いただきました。展示にくわえて、必見は龍子公園。旧宅と画室をほぼ当時のまま保存公開していらっしやいます。画室が吉田五十八の設計で、昭和13年に建てられました。建物の細部まで意匠が凝らされており、お庭と見事に調和した美しい空間です。



(中、右) 龍子公園の様子。葉も少しずつ色づき、散策するのが楽しい季節でした。

バスは一路神奈川県鎌倉市へ。続いての訪問先である山口蓬春記念館は、昭和23年に購入した自邸を吉田五十八設計により増改築したもの。特に画室は吉田五十八のエッセンスがたっぷりと詰まっています。山口蓬春と吉田五十八は東京美術学校(現・東京藝術大学)で同窓だったからでしょうか、蓬春が描きやすいように考えられて設計されたように思えます。こちらでも大道館長、学芸員の笠さん、吉田さんにご説明をいただきました。



(右) 山口蓬春記念館の画室にて。



お待ちかねの昼食は、engawa café & restaurantさんでいただきました。こちらは神奈川県近代美術館葉山館のすぐ近くにある古民家レストランで、建物は築80年。もとは天皇家の御殿医で侍医長だった塚原伊勢松の屋敷だったそうです。お料理は、葉山館で開催中だった「ユートピアを求めて」展に関連して、ロシア料理を中心としたメニューでした。



この日のメインはサーモンとホタテのバイ包み。



最後の訪問先は、鎌倉市鏑木清方記念美術館。こちらは鶴岡八幡宮の近く、もっとも人で溢れ変える小町通りから一本裏へ入った場所にあります。清方は吉田五十八を懇意にしていたそうで、依頼した牛込矢来町の画室をたいそう気に入って、昭和29年にこの鎌倉に画室を構えた際にもそれを模して採り入れました。記念館で公開されている画室は、建築当時の部材をそのまま使用して再現されているそうです。展示室では「泉鏡花生誕140年記念 清方が描いた鏡花の世界」が開催されており、学芸員の宮崎さんが軽妙な語り口で清方の作品について解説してくださいました。

当館でも2014年9月から企画展「鏑木清方と江戸の風情」を開催いたしますので、ご期待ください。



小町通から一本入るだけで閑静な空間が広がります。

いずれの施設も近くで作品を鑑賞でき、素晴らしい建築や環境が堪能できます。みなさまも足を運んでみてはいかがでしょうか。また、今後もバスツアーを開催予定です。どうぞ奮ってご応募ください。

[広報 磯野 愛]

吉田五十八は近代数寄屋建築の祖とされ、戦後の和風建築に多くの影響を与えた建築家。父・太田信義(太田胃散創業者)58歳の時の子であることから「五十八」(いそや)と名付けられたという。東京美術学校(現・東京藝術大学)建築科卒業、昭和24〜36年東京藝術大学教授。昭和39年文化勲章。

2014 年度上半期展覧会のお知らせ

光琳を慕う—中村芳中	4月8日(火)ー5月11日(日)
島根県立美術館所蔵 水彩画家・大下藤次郎展(仮称)	6月29日(土)ー6月29日(日)
夏休み特別企画 江戸へようこそ！浮世絵に描かれた子どもたち	7月8日(火)ー8月31日(日)



(上) 中村芳中『光琳面譜』より 享和2年刊 千葉市美術館
(ラヴィッツ・コレクション)

※都合により予告なく展覧会名、内容の一部が変更となる場合がありますのでご了承ください。

◎ 千葉市美術館「友の会」会員募集中

展覧会が何度でも観覧でき、展覧会図録も一割引で購入できる「友の会」入会が大変お得です。

[会員の特典]

- 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
- 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
- ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズを10%引で購入できます。(一部除外あり)
- 展覧会や講演会等の美術館情報をお送りします。
- 会員対象の催しもあります。

	一般会員	学生会員 (大学・専門)	ファミリー会員 (ご家族4名様まで)
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

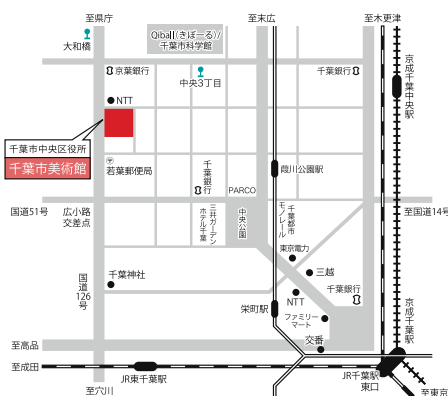
入会のお申し込みは美術館受付にて。

◎ 編集後記

新年あけましておめでとうございます。新春にふさわしく、1月25日からは浮世絵の展覧会を開催いたします。今号の表紙も出品作品の中からおめでたい雰囲気のものを選んでみました。七福神のうちの福祿寿、大黒天、恵比寿天が吉原で遊興する図です。神様とは思えないほどデレデレ顔で遊んでいて、つい笑ってしまう作品です。このような江戸の遊びや生活、文化を浮世絵から探ってみるという「江戸の面影」展。新春は他館でも浮世絵展が多く開催されますので、趣向を見比べてみるのも一興です。

2014年もバラエティに富んだ企画展をご用意しておりますので、展覧会ごとに足をお運びいただければ幸いです。本年も千葉市美術館をよろしくお願いいたします。

[広報 磯野 愛]



[開館時間]

10:00-18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[交通案内]

- JR千葉駅東口より徒歩約15分
- バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
- 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- 東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- 地下に駐車場があります

[編集・発行]

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
<http://www.ccma-net.jp/>
[発行日] 2014年1月17日
[印刷] 株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

